

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

## ヤズィックアグルの蒼い空 14 アタック体制整う 2

12:10 に C2 に到着。明日の登頂を睨んで、佐藤、三戸呂の両君に上部偵察とルート仕事を依頼する。稜線までのルート工作ができれば明日の登頂の可能性は非常に高くなる。今回の遠征隊では、若い二人の隊員の頑張りにはどんなに感謝しても感謝しきれない。水汲み、トイレ作り、食事の用意・・・、高所で一つ一つの動作が苦しいのは誰もが同じなのに、顔をむくませ、頭痛に耐えながら、どんな時にも嫌な顔一つせず、率先して行動に移ってくれた。

C2 から双眼鏡で覗くと、偵察隊の動きは手に取るように見える。14:15 その偵察隊がリッジを登り詰め、頂上稜線に抜けた。彼らも嬉しいのだろう、無線の向こうの声も弾んでいる。稜線直下に3ピッチのフィックスを張り、標高 6250m まで達したという。15:00、稜線を更に進み、黒い岩峰を越えたところまで到達したという無線がはいった。これを聞いて、C2 からは本日の行動の打ち切りとねぎらいの言葉を伝えた。

明日のためにとっておきたいような無風快晴の蒼い空の下で、ヤズィックアグルは、



登頂前夜の C2

その名の通り今日も少し右に傾げた三角の頭をすくと持ち上げていた。22 日に初めて見た時以来、ほとんど毎日その姿を惜しげもなくさらしてくれたヤズィックアグル。一昨日の雪でその白さを増したその姿は、純白の花嫁衣装をまとい、我々の到着を待っていてくれるかのようだ。すべての準備は整った。いよいよ明日で決着がつくのか、それとも・・・。

今日ほどの天候は望めないにしても、なんとかこの好天周期が続

いてほしい。そう願わずにはいられなかった。

16:00 偵察隊が無事帰幕。登頂前夜の夕食は味噌仕立ての雑煮。日本食パワーで元気が出す。頭痛が少々あったので、薬を飲んだ。寝る前にテントの外に出ると満天の星。ランタンの灯りがこぼれるテントが暗闇の中で黄色く光り、その上には三日月がかかっていた。

## 頂上アタック 1

8 月 4 日、昨夜は気分の高揚もあったのだろう。12:00 にトイレに起きてから眠れず、1 時間おきに時計を見ていた。それでも時折は眠っていたのか、気づくと時計は 4:03 を表示していた。テントの中にいると風もなく、静かである。

「おい、4:00だ。だれか天気をみてくれ。」という、三戸呂君が「星が出ています。」という。「よし、行くぞ。」と気合いを入れて食事の準備を始める。食事を終え、テルモスにお湯を入れて外に出ると、薄暗い中、黎明の日を受けてヤズィックアグルが光っている。昨日と同じピーカンの予感。風は、多少はあるものの、このくらいならそよ風だ。

C2を出たのは予定よりやや遅れて6:20。昨日、若い二人が3ピッチの工作をしてくれたので、7:30には頂上稜線に出た。この稜線が分けている左右の氷河がC1のところ合流しているのがよくわかり、その先大蛇のようにうねりながら長く続いている。ここまで登るとすでにC2は豆粒ほどの大きさでしかない。僕らの上には何処までも蒼い空が広がっていた。頂上は近いのか遠いのか、なかなか距離感がつかめないが、この天気ならば今日の登頂はまず間違いないものと確信した。しかし、そこは未踏峰。そうやすやすとその頂上を私たちに明け渡してはくれなかった。

9:00 高度計の表示が6420mを指す。ここで一本取りながら見ると、頂上までは6段くらいの段差が見えた。とりあえず斜度が急になる手前の3段目の段まで登ろうと歩を進める。アイゼンが心地よく決まり、快適なウォーキングだった。次第に高度があがり、目の前のピーク以外に僕らの視界を遮るものはない。

いよいよ最後のドームの下に出た。斜度は傾斜を増し、雪の状態もよくないので、ロープを出した。昨晚の打ち合わせで決めていた通り、一方は久根さんと佐藤君で、もう一方は三戸呂君と僕がそれぞれアンザイレンし、松田さんは僕らのロープのミッテルに入れた。最初に三戸呂君を行かせる。2パーティが交互にルートを伸ばし、互いのロープをフィックスしては先に進んでいくという作戦を取る。最初の1ピッチは、まだそれほど急ではなかったが、ペラッとした嫌らしい感じの斜面で、トップの三戸呂君が終了点の支点をなかなか取れずに苦戦した。その先は急に斜度が強くなってナイフリッジ状の斜面へと続いていたが、ここは佐藤君が頑張っってルートを開く。

ナイフリッジは再び三戸呂君が先行し、乗りこえて4段目の台に乗ると、その先には頂上直下の最後の長い急斜面が立ちはだかっていた。BCから見ても最後の難関になるだろうと思われた壁だ。最大斜度は60度を越えている、3ピッチの壁。久根、佐藤パーティがまずこの壁に取り付いた。腿までのラッセルが体力を奪う。

ジリジリと時間が過ぎ、すでにロープを出してから2時間以上が経過して午後1時を回った。午後になって風が出てこないことを祈る。C2から見た限り、6時間程度で抜けられるだろうと踏んで、万が一の場合でもタイムリミットを2時と考えていたが、すでにその時間が迫っている。



久根さんを確保する佐藤君

これ以上突っ込んで大丈夫だろうか？登攀隊長として、難しい判断を迫られる瞬間が近づいてくる。